

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名(姓、名)	アリムラ ナオキ 有村 直輝	授与番号 甲1482号
学位の種類	博士(文学)	授与年月日 2021年 3月 31日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者 [学位規則第4条第1項]	
博士論文の題名	A.N.ホワイトヘッドの形而上学研究：＜論理学と美学＞の観点から	
審査委員	(主査) 加國尚志 (立命館大学文学部教授)	伊勢俊彦 (立命館大学文学部教授)
	中村 昇 (中央大学文学部教授)	
論文内容の要旨	<p>【論文の構成】 本論文は「序論」「緒論」「第一部」「第二部」「結論」で構成される。内容は以下の通りである。</p> <p>【論文の内容】 本論文は20世紀イギリスの哲学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの形而上学について「論理学」と「美学」の観点から研究し、彼の形而上学において「論理的なもの」と「美的なもの」がどのような機能を果たしているのかを明らかにし、そのことにより彼が形而上学を構築するにあたって依拠した認識や直観を探り出し、それがどのような一般化を施されているのかを論じるものである。</p> <p>一般にホワイトヘッドの哲学は、最初期のラッセルとの共著『プリンキピア・マテマティカ』における論理主義的な数理哲学から後期の『過程と実在』に見られるような「有機体の哲学」、全実在を過程として生成しつつあるものにとらえる思弁的形而上学へと移行したものと理解され、大きな転換があったとされる。本論文ではこうした思弁的形而上学への形成において「論理的調和」「美的調和」という考え方が重要な役割を果たしており、この「調和」とは、ホワイトヘッドの同僚でもあったシェーファーが提示した、論理学における「両立不可能性(incompatibility)」「非共立性(inconsistency)」に由来するものであることが示され、宇宙の進展はこの二つの調和によって条件づけられているという信念がホワイトヘッドの思想を説く鍵となっていることが示される。</p> <p>緒論では、議論の導入としてホワイトヘッド『思考の諸様態』の「理解」の章の解釈が論じられる。この著作でホワイトヘッドは「理解」における自明性-明証性をもたらすものとしての直観を論じ、そこに「論理的なタイプの非共立性」と「美的なタイプの非共立性」を認めている。本論文では「論理的調和」を、包摂と排除を経て契機ないし統一体のうちで達成されている＜諸要素が共にある状態＞にとらえ、宇宙にこのような「論理的調和」があるということが論理学の根拠となっているとするホワイトヘッドの信念を取り出し、「調和」や「非共立性」が彼の思弁哲学の形成の謎を解く鍵であることが示される。</p> <p>つづく第一部では、まず第一章で、形而上学へと移行する過渡期(1924~1925年)にあるホワイトヘッドが『科学と近代世界』『ハーヴァード大学講義録』で「自然の秩序」のさらに根底にある「より広い秩序」の記述を試みており、そこでは論理学は創発的なものと永遠的なものがこの秩序において接する際に生じる包摂と排除の仕方を扱う学として定義していることが確認される。つづく第二章では、この時期のホワイトヘッドにおける「美的</p>	

なもの」の定義が考察され、彼の形而上学を「実在の実現の組成の記述」と「その組成への（美的）価値の織り込み」という二重の試みとして位置づけ、『ハーヴァード大学講義録』では、諸要素の選択と排除が美的価値の実現でもあるとしていることが明らかにされる。

第二部では、彼の形而上学が展開される『過程と実在』『観念の冒険』での「有機体の哲学」における「論理学」と「美学」の問題が考察される。第一章ではホワイトヘッドによるプラトン『ソフィステス』やシェーファーの「両立不可能性」の概念への言及を手がかりに、この時期の彼の論理学観が明らかにされる。この時期のホワイトヘッドは「パターン」の概念を重視しており、「両立不可能性」概念は「パターン」の概念を支えるものとして考えられていたことが示される。ホワイトヘッドはパターンと両立不可能なものとの排除との探究という点において論理学と美学に重なる部分があり、美学の基礎に論理学がなりうると考えていたのである。第二章で『過程と実在』の基本概念や原理を確認した上で、第三章では「両立不可能性」の概念が「有機体の哲学」において果たしている機能や位置づけが論じられる。ホワイトヘッドはこの概念を「感受(feeling)」の理論において用いており、「論理的両立不可能性」と「美的両立不可能性」は「現実的存在(actual entities)」の生成の制約に基づき排除ないし回避されるべきものとして位置づけられている。この制約がホワイトヘッドの「予定調和」の論理的形成条件と美的形成条件とされていたことから、この両立不可能なものとの排除という信念がホワイトヘッドにおける予定調和説に結実しているのではないかという仮説が提出される。第四章では「有機体の哲学」における「パターン」概念が「コントラスト」の概念との関係から確認され、ホワイトヘッド形而上学における論理学がこの「パターン」概念をもとに理解されることが示され、最終章ではホワイトヘッドが芸術に「真なる美(Truthful Beauty)」の探究を認め、これまでに確認された実在の実現が、両立不可能性の概念を基礎として美的価値を実現することであり、ホワイトヘッドにとって芸術は、それぞれの現実的存在によって実現される多様な〈美〉とその実現を目指す活動として彼の形而上学に認められていたのである。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文審査の結果の要旨</p>	<p>【本論文の評価】 本論文では、論理主義から思弁的形而上学へと方向転換したとされるホワイトヘッドにおいて、「両立不可能性」の概念が一貫してその思索の根底に置かれていたこと、そしてこの「両立不可能性」の排除という観点が「論理的調和」と「美的調和」の二様において認められ、ホワイトヘッドにおいて論理学と美学はともに実在の生成-実現を示すものとして重視されていたこと、そして実在の実現はこの論理学に由来する「両立不可能性」を基礎としながら、両立不可能なもの排除を通じて価値を実現することとして理解されていることが、先行研究及び関連文献を十分に渉猟した上で委細を尽くしながら示されている。この解釈はホワイトヘッド哲学における実在の実現がまた価値の実現であることを理解するために「両立不可能性」を重視する必要性を示しており、難解を以て知られるホワイトヘッド哲学の根本の理解に貢献するものであると評価できる。また本論文は二年前に公刊されたばかりの『ハーヴァード大学講義録』を資料として用い、その精査をもとに解釈が行われており、この新資料を用いて過渡期のホワイトヘッドの思想をとらえるという研究史上の新しさと、この新資料の研究史上の意義を示したものとしても評価できる。また論文で論証される仮説の明確な提示、その論証に向けての論述の一貫性など、「論旨の明確さ」「論証の明瞭さ」なども評価できる点である。</p> <p>公開審査においては、上記の評価すべき点に加えて、ホワイトヘッド形而上学における「論理的なもの」と「美的なもの」だけではなく、「善」の問題、さらにライプニッツの予定調和説との対比におけるホワイトヘッドの「神」概念の問題なども論じられるべきである点、また「信念」という概念をめぐる訳語の選択にあいまいさがある点、「両立不可能性」と「矛盾」概念の関係についての解釈の不明瞭さなどが指摘され、「両立不可能性」に関わる「シェーファー・ストローク」の理解などが質問されたが、申請者はホワイトヘッド哲学についての理解に基づきながら、今回の論文で論じることのできた問題と論じることのできなかつた問題の所在についての認識を明確に示し、概念の理解についても解釈上の根拠を示すことができた。また、全体の論述の完成度からして、それらの問題点が本論文全体の価値を損なうものではないことも明らかである。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公開審査は2021年1月9日（土）14時00分から16時00分まで、オンラインによって行われた。</p> <p>審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である【西洋哲学】および【ホワイトヘッド哲学】について、申請者の【西洋哲学及びホワイトヘッドに関わる知識】、【論述に関わる哲学史的概念の知識】について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。また、本学大学院文学研究科人文学専攻哲学専修博士課程後期課程の在籍期間中における学会発表などの様々な研究活動を通じて申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。</p> <p>したがって、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。</p>